特集・メディアの結節点としての〈口承〉

名所の成立と桃太郎神社

――観光地の伝説を読む――

斎藤　純

本稿は、観光地の伝説や名所の由来を検討し、見立ての重層あるいは見立ての伝統ともいうべき現象を指摘する。具体的には中京地区の有名な観光地、日本ラインで知られる愛知県犬山市付近の木曽川を扱う。なお、同地には、昭和初年に桃太郎を祀る神社が創建されており、その背景にも言及したい。

一　名所の由来にみる異郷憧憬

(1)西洋への憧れ

①日本ラインのローレライ

a　お富岩・与曽松岩

日本の中部地方屈指の大河木曽川に、ドイツのローレライに比べられた伝説がある。

ローレライとはライン川中流の巨岩が聳える難所で、水の精の乙女が歌声で舟人を惑わし、舟を難破させた所として知られる。ハイネの作詩（一八二三～二四）、ジルヒャー作曲（一八二九）の「ローレライ」の歌が有名で、明治四二年（一九〇九）に近藤朔風（逸五郎）が翻訳し（天谷秀・近藤逸五郎『女声唱歌』水野書店）、唱歌として日本に広まった。

ただし、小塩節『ライン河の文化史』によると、もともとローレライの岩はコダマによって旅の安否を占う場所であり、水の精の歌が舟人を誘惑したというのは、実はロマン派詩人たちの想像の産物だった。当時、民間信仰に触発された新たな物語がいくつも作られ、立川希代子「ハイネのローレライ詩―ローレライはうたっているか」の表現では、「ハイネがローレライ詩をつくった一八二三年頃、ローレライ物語は『最新流行の、語り伝えになりつつあるメールヘン』だった」という。(注1) それが約八〇年後、近藤により「昔の伝説（つたえ）」として日本に紹介されたわけである。

こうしたローレライに見立てられたのは、愛知県犬山市栗栖付近の木曽川中の二つの岩である。次の文章は、大正一二年（一九二三）の吉田初三郎の観光案内図『天下絶勝　日本ライン名所図絵』(注2)

（名古屋鉄道　名鉄資料館蔵）の記載である。

【資料一】右手に栗栖の山々を眺めて尚ほ進んで行くと川の真中に二つの巨巌が上下相駢んで立つ、上を〔おとみ岩〕下を〔与曽松岩〕と称しラインのローレライ神話にも似て居る伝説の巌である

次の【資料二】は、同じ冊子に引用された児童文学者巌谷小波の文章の一節。

【資料二】それにつけても此勝地を日本ラインとはよくもつけたその川の水の富むこと、その岸に古城址のあること而もあのローレライに似た岩もこゝにある　ましてや桜あり紅葉ありつゝじあり香魚あり　これ或は日本ラインの本場ラインに勝る所か

この冊子は具体的な伝説を記さないので、昭和三年（一九二八）の吉田初三郎著・観光社出版部編の観光案内図『日本ライン探勝案内』（犬山町役場　岐阜県立図書館蔵）で伝説を紹介する。

【資料三】いよ〳〵右岸にライン名題（代）のお富岩、与曽松岩が現れた。先なのが与曽松、後なのがお富、以下―簡単に此の涙ぐましい伝説を御紹介せ（し）よう。お富は栗栖村の名主甚太夫の一人娘、家運没落のために機織り娘とはなってゐたが、其美貌と美声とは誰しらぬ者もなかった。与曽松は大力無双の大男、木曽川切っての舟人で、二人はふとした機縁から相思の仲になってゐた。やがてお富は其美貌のために加治田の城主斎藤龍幸の側女として召出されたが、城主の意に従はないので遂に城内の牢獄に投ぜられ、苛（呵）責の笞は日々に加はった。快男子与曽松奮起の時が来たのだ。一夜加治田城内へ乗込んだ彼は、牢を破ってお富を救けて逃げた。多勢の追手が槍や刀の襖を作って追駆けてきた。与曽松は彼女に早く舟に乗って河を渡り、栗栖の二つ岩で待つやうにと云ひ含めて先へ落し、一人で此の大敵と闘った。お富は岩の上で与曽松を待ちに待ったが遂に姿が見えぬ、思ひ定めて遂に岩の上から身を踊らして了ったのだ。其処へ大敵を潰した与曽松が抜手を切って泳ぎついてきた。が、舟はあれど彼女の姿が見えぬ。舷には消炭のあとも果ない書置が…彼は泣いても泣き切れない思ひ、つゞいて下の岩から身を投じて了った。―此時から木曽川に異変が生じた。舟を下して此二つ岩へかゝると、此の河の底から、とても耐らない美しい声で機織唄を唄ふ声がきこえる。正しく在りし日の美しきお富の声である。是に魅かれたやうになって舟人共に富士瀬に巻きこまれ命を喪ふもの数しらず、舟子の恐怖はやがて木曽川交通の杜絶となって了ったのである。夫を継鹿尾の寂光上人が済度して、お富の歌ふ悲恋の唄も再び聞こえずなったといふ…。ローレライ神話に髣髴たる一扁の物語、幸に遊子の旅情を慰めるものがあるなれば、二つの惨ましき魂に一拝の礼を与へたまへ。

伝説中、「加治田の城」とあるのは、岐阜県加茂郡富加町にあった戦国時代の山城、加治田城（別名　古城山城）。織田信長の中美濃攻めで歴史に登場し、佐藤紀伊守忠能、斎藤新五郎長龍（一名利

宣）、斎藤（肥田）玄蕃の三城主が知られる。斎藤龍幸なる名は確認できないが、伝説は加治田城が脚光を浴びたこの時期を舞台とするものだろう。(注3)

また、「継鹿尾の寂光上人」の継鹿尾とは犬山市継鹿尾にある真言宗寺院継鹿尾山八葉蓮台寺寂光院のこと。白雉五年（六五四）開基と伝える古刹で、信長もその寺領を安堵している。寂光上人なる人物は未詳だが、伝説中では寂光院の高僧といった役割だ。

冊子の伝説は美文調で語られ、潤色の跡は明らかである。ただし、潤色は冊子に記す際になされたばかりではなく、継鹿尾山の高僧の済度を物語る点からみて寂光院の利生譚として既に編成・脚色されていたものだろう。

とはいえ、伝説には他地域の伝説と共通の要素が読み取れ、すべてが創作とみることはできない。

b　類話と伝承的要素

まず、水中から機織唄が聞こえるという点は「機織り淵」伝説と共通する。すなわち、淵や池の底から機を織る音が聞こえる、あるいは機を織る女がいるという伝説で、機織り池とも呼ばれ全国に広く分布する。(注4) しばしば機織女の悲運の入水をいい、岐阜県恵那郡遠山村馬場山田（現・山岡町）の機子池に次の類話がある。

【資料四】昔、霧ケ城の付近に一人の美しい機女が住んでいた。領主が召使わんとしたが、女はしばしば辞退した。再三の請に苦しんで、ついにこの池に投じて死んだ。それから毎夜、池の底から機を織る音が聞こえてくるといい伝えている。(注5)

犬山市でも、木曽川付近の低湿地だった上野地区で塚の伝説になった話があり、当地にも「機織り淵」伝説を成立・伝承させる条件があったことがわかる。

【資料五】犬山町上野字八幡の大門といふ所に機織塚といふのがある。夜塚の付近を通ると女が機織をしてゐるやうな音がする。それで機織塚といふやうになった。(注6)

こうした「機織り淵」の伝説が、水中から機織唄が聞こえたというお富・与曽松岩の伝説の核をなしていたと考えられる。

また、城や合戦など戦の場から逃れてきた女性が、夫や恋人が死んだと思って入水し、以後、不思議が起きたという伝説が栗栖上流の岐阜県美濃加茂市に伝えられている。

【資料六】美濃加茂市の日本ライン発着場下流に夜泣岩と姫ケ渕がある。昔、戦に破れた平和盛の妻、恵礼門院が当地へ落ちのびてきた。恵礼門院は旅人から夫の死を聞き、月夜に大岩の上からこの淵に飛び込んだ。以来月夜になると、女の姿が岩の上にあらわれて泣く。(注7)

さらに類似した伝説が、やや離れるが三重県阿山郡島ケ原町に伝わる。下流の木津川弓が渕（京都府相楽郡南山城町）の由来譚で、

【資料七】王朝の昔、大和守の家臣に菅通臣という強弓の男があり、名張の大領の娘に美しい女があった。二人は愛しあっていたが反対があって添い遂げられず、男は娘を奪って伊賀田という所に隠れたが、ほどなく追手に見つかった。男は娘に親元

に帰るよう諭し、追手と戦って弓を持ったまま渕に沈んだ。これを知った娘も渕に身を投げた。その後、ある夕方、弓を持つ白衣の者が女をつれて島ケ原の正月堂（観菩提寺）に詣でる姿を見た村人があった。(注8)

細部の決定はできないが、以上のような「機織り淵」伝説、特に城主に召された機織女が入水する【資料四】のような類話と、戦いの場から逃れた女性が恋人の死を知って入水する【事例六・七】のような類話（いわゆる「姫ケ淵」伝説の一種）が複合し、寂光院の利生譚としてまとめられたのがお富岩・与曽松岩の伝説と考えられる。

とすれば、伝説に語られていた入水後のお富の行為は本来は機織に重点があり、水中から聞こえるのは機織にともなう音全般であったはずだ。それが高僧の済度の話になり、それに応じてお富の行為も救われるべき亡霊のもたらす災いという性格を強める。そして、水辺の音が舟人を害したという点が、後述のように木曽川をライン川に見立てる過程でハイネのローレライと比べられ、音の中でも特に歌に重点が移っていったのである。

②日本ラインのジーグフリート

a　宿龍池の伝説

日本ラインには、ジーグフリートの竜退治に見立てられた伝説地もある。

前出の昭和三年（一九二八）吉田初三郎著・観光社出版部編『日本ライン探勝案内』（犬山町役場　岐阜県立図書館蔵）は、瑞泉寺の項で次のように記す。

【資料八】瑞泉寺　寺号を青龍山といふは開祖の日峯和尚が草創の地を求めて此の所の岩を杖で突くと、忽ち岩破れ、泉迸って、一道の白気天を貫き、青龍勇躍して昇天したといふ伝説に基いたもの、是れがやがてジーグフリートのドラゴン退治に比せられたのである。境内には其の由緒ある青龍池（宿龍池ともいふ）をとゞめて瑞泉十景の一に数へられてゐる。

青龍山瑞泉寺は犬山市犬山にある臨済宗妙心寺派の寺院。応永二二年（一四一五）、日峯宗舜の創建で、日峯の師の無因禅師を奉じて勧請開山に迎えたが、事実上の開山は日峯であり、伝説は日峯を主人公とする。

なお、大正一二年（一九二三）吉田初三郎『天下絶勝　日本ライン名所図絵』（名古屋鉄道　名鉄資料館蔵）は、主人公を無因禅師とするものの、同様な宿龍池の伝説を紹介する。ただし、これにはジーグフリート云々といった記述はない。観光案内の出版物でジーグフリートへの言及が見られるのは、管見では昭和三年（一九二八）『日本ライン探勝案内』からである。同六年の犬山の案内書、可児枡太郎『日本ラインの犬山』（犬山町役場）は、次のように記す。

【資料九】右舷第一に見ゆる山は瑞泉寺山で、緑青の如き松杉の間に堂塔伽藍の甍や青丹の色がチラチラと隠見して居るのが、古刹瑞泉寺で、大川友右衛門に由緒の血達磨や龍の昇天した宿

龍池がある。此の伝説は欧州ラインの伝説［ドラヘンフエルネ（スの誤）］に酷似して居る（八八頁）。

ドラッヘンフェルスは「龍の岩」という意味の地名。ライン川がローレライのある山地を抜けるあたり、ボンの対岸にズィーベンゲビルゲ（七つの山）という山地があり、その一番高い丘の名である。『ライン河の文化史』によると、「龍の岩」には「『ニーベルンゲンの指輪』の主人公ジークフリートがここで龍を退治し、龍の血の池に身を沈めて全身不死身のからだになった。そのとき一枚の木の葉がジークフリートの背中に舞い落ち、その一個所だけは不死身ではなかった。それが彼の死のもととなった」という伝説があり、「龍の血をたたえた池という、伝説の窪地もある」という。(注9)【資料八】のジークフリートのドラゴン退治とは、これを指したものだ。

b　縁起からみた竜

宿龍池の伝説は、近世の地誌や随筆にも記される。【資料一〇】は、文化一四年（一八一七）序の地誌『犬山里語記』の巻之四、青龍山瑞泉寺の条の記載である。

【資料一〇】一、青龍池　開山堂の北隅也、清泉湧出てたゆることなし、干魃の節僧衆雨を此の池ニ乞ふ、感応顕然たり、又宿龍池といふ、むかし青龍飛出て天に登り、霊泉湧出たり、青龍山瑞泉寺とハここによる事也(注10)

同条には瑞泉寺の縁起も記され、それによると、応永の頃、犬山の継鹿尾山寂光院にやってきた日峰上人に、帰依者の内田左衛門次郎が寺院建立用の土地の提供を申し出る。縁起の文章によると、

【資料一一】左衛門次郎日、私ニよき山有、師に奉ん、師応諾して次郎を案内に立、峯々谷々迄御覧有地ハ佳境也、只恐らくハ水のなき事を又玄瑞沙弥をして見せしむ、たちまち岩間より冷水湧出て、少し湛る事小池のことし、青龍舞戯して天に登る、今の宿龍池也、則此山を草創して青龍山瑞泉寺と号す。(注11)

ほぼ同様な話は、明和八年（一七七一）の随筆『雑話犬山旧事記』五が採録した「青龍山瑞泉寺起」と「同青龍山瑞泉寺起縁或老翁物語タル由存出記之」にも見られる。(注12)一部、文意の不明な箇所があるが、山中に水がないのを危ぶんだ日峰上人が沙弥の玄瑞に泉を探させ、上人がその泉を見た時、水溜りから青龍が昇天したのが宿龍池（龍は上人にしか見えなかった）。これが青龍山の寺号の始まりだというものである。(注13)

以上の伝説で、泉の発見と同時に竜が現れる点、また【資料一〇】で池が雨乞いの場になっている点から、竜に水神としての性格が読み取れる。宿龍池の名称や、山中から湧き出す水の中にいたことは、土地に住みついていた支配者、いわゆるヌシとしての性格を示す。その支配する水が、支配地に建てられる寺院に供されるようになったと伝説は説くのであり、宿龍池の伝説の眼目は、開山の際、ヌシが寺院の守護者や奉仕者に転じ、水の欠乏が解消されたとうたう点にあったと考えられる。

なお、縁起と【資料八】の伝説を比べた場合、縁起では日峰が玄瑞に泉を探させるのに対し、【資料八】は直截に日峰に焦点をあて、

しかも彼が杖でついた所から泉が湧いたとする。縁起の方が時代が古いのだが、高僧が杖で泉を湧かせる奇跡譚は「弘法清水」伝説のように全国に数多く見られる。また、宿龍池伝説の役割から考えても、ヌシを守護・奉仕者に転じさせ、水不足の憂いをなくしたのは日峰の行為とする方が、敬まれるべき開山の高僧の力をよく示し、聞く者も納得しやすい。これらの点を考慮するなら、類型的で構成も素直な【資料八】の伝説も、縁起と並行して民間に伝えられていたと考えられる。

この【資料八】の宿龍池とドラッヘンフェルスの類似点は、優れた力を持つ人物と竜との交渉があり、記念の池と、竜にちなむ地名が残ったという点だが、宿龍池の場合、「退治」とはいえない。

もっとも、ヌシが支配地の寺院の守護・奉仕者に転じたということは新しい支配者の力を承認したということを含意し、この点が強調されると同趣旨の伝説が高僧に屈伏する竜の話に展開する可能性がある。(注14)

とはいえ、【資料八】で竜は「勇躍昇天」し、縁起では「舞戯して天に登る」だ。竜は歓喜して主人公に姿を示しているかのようである。「退治」との差は大きい。

このように無理のある見立てであるが、木曽川とライン川を比べようとする指向は、大正一二年の時点で、すでにローレライを発見していた。いったん対比が始まれば、ほとんど見立て遊びのように次々と彼我の類似点が列挙される。後述のように昭和初期、様々な対比の項目が探しだされるのだが、宿龍池も、次なるラインの伝説として脚光を浴びることになったのである。

(2)中国への憧憬

①日本ラインの白帝城・浣華渓

犬山付近の木曽川がドイツ・ライン川に見立てられる以前、中国の詩跡に見立てられた名所があった。

概要を示すため、後の時期のものだが昭和六年（一九三一）の可児枡太郎『日本ラインの犬山』(犬山町役場）の記載をあげる。同書は犬山城の別名「白帝城」を次のように紹介する（一六～七頁)。

【資料一二】元、亀甲城と云ひしを、享保年中当時の儒者であった荻生徂徠が、

朝辞白帝彩雲間　千里江陵一日還
両岸猿声啼不止　軽舟已過万畳山

とある、李白の詩によって命名したものであると云ひ伝えられて居る。

続いて城の外観・構造を記した後、村瀬大乙の漢詩「白帝城」二編、(注15)同じく松平君山の漢詩「擬上白帝城」一編、(注16)佐々木信綱の和歌「白帝城にて」一首を掲げる。

また、同書第八章第二節「勝地」の「(七）莞花渓」、第三節「日本ライン」の「(五）両舷に展開する山容水態」には次のような記述もある。

【資料一三】川下には遠く粉壁の犬山城が山裾に覗くなど誠に

天下の奇勝で、支那の蜀の棧道に能く似て居ると云ふので、莞花渓の名があると云ふ（七三～四頁）。

【資料一四】[莞華渓] は不老閣より約一丁の上流にある烏ケ峰の山裾で、川から直立した懸崖に桟橋を以つて通じてゐる。此所が莞華渓で下流遙かの山と山との間に白帝城の白い顔が覗いて見える。此の景趣は支那の蜀の錦江にあるのと能く似て居ると云ふ（八九～九〇頁）。

「（五）両舷に展開する山容水態」には次のような記述もある。

【資料一五】[栗栖の里] は右舷に見ゆる翠緑滴るばかりの山と清冽銀の如き蘇川の水とに迫られた幽境で、桃太郎の出生地とか云ふ伝説がある里で、栗栖の河岸一帯は赤褐色の余り高くない岩が数丁続いてゐる。（中略）[日本赤壁] は左舷に水面より九天の上迄唆り立ち石斧を以つて削り立てたる如き断崖絶壁をなして恰も支那の赤壁に似たと云ひ、山高月小にの趣がある（九一頁）。

②白帝城と徂徠命名説

これらの記載の出典や根拠、見立ての成立時期について、残念ながら詳細は不明である。

一応、白帝城の命名に関しては、昭和四年（一九二九）訂正再版の成瀬美雄『犬山城沿革』（昭和二年初版　智仁勇社）に次の記載がある。元禄一六年（一七〇三）、犬山城第四代城主になった成瀬正幸の条である。

【資料一六】享保二丁卯年（一七一七）十月廿七日徳川継親（五代尾州侯）犬山に親臨。／藩主の嘱に依り荻生徂徠犬山城を白帝城と名ぜりとの伝説あり此頃なるべきか（一八頁）。

著者の成瀬美雄は旧犬山藩主成瀬家第一〇世成瀬正雄の弟で、記述ぶりから考えて何か成瀬家の家伝があったかのようである。

この記載が可児枡太郎の記述や、本格的な犬山城史というべき柴田貞一の『犬山城物語』（昭和二〇年代稿）[注17] などで踏襲されるのだが、いずれも荻生徂徠（一六六六～一七二八）の命名を証する史料は掲げられていない。

なお、前掲『日本ラインの犬山』所収の漢詩「擬上白帝城」が、天保一二年（一八四二）成稿（出版は明治一三年　一八八〇）の『尾張名所図会』後編に掲載されている。巻六の「岐蘇川北岸より乾峯城（いぬやまのしろ）を望む図」に添えられた詩で、同じく「擬上白帝城」の題、「君山」という作者名、さらに君山の自選漢詩文集「幣帚集」の名が記される。松平君山は元禄一〇年（一六九七）から天明三年（一七八三）の人。『張州府志』など藩の地誌を多数編纂、領内を巡見し、漢詩文もよくした尾張藩の儒学者である。[注18]

『尾張名所図会』は巻末に参考書目一覧を付すなど周到に編まれ、記載の信頼性が高く、[注19]「擬上白帝城」の詩が犬山城に即して作られていた可能性は高い。[注20]

また、君山の『張州府志』（宝暦二年　一七五二）は、栗栖村の「栗栖渡」の項（巻第十五　丹羽郡　津梁）で付近の急流・巨岩に

ふれ「可謂巫峡景也」と評している。[注21] 巫峡は中国の長江三峡の一つで三峡入口には白帝城が聳える。すなわち李白の詩の舞台である。

『張州府志』は犬山城の別名「白帝城」を記してはいないが、少なくとも君山の時代までには、長江の急流を木曽川に重ねる見方が生じていたと考えてよいだろう。[注22]

③浣花渓の起源

白帝城のほか中国の詩跡をふまえた名所に、栗栖付近の断崖がある。【資料一三・一四】には「莞花（華）渓」と記されているが、大正一二年（一九二三）『天下絶勝　日本ライン名所図絵』（吉田初三郎著　名古屋鉄道　名鉄資料館蔵）の次の記載をはじめ、ほとんどの案内書は「浣花（華）渓」と記す。

【資料一七】〔継鹿尾山〕の木曽川に迫った処断崖千尺、其下に栗栖に通ずる道がある、〔浣華渓〕といふ

本来の浣花渓は中国四川省成都市の西郊を流れる錦江の支流南河にあり、ほとりに杜甫の住んだ杜甫草堂があることで知られる。成都は蜀の国都で、ここから長安（西安）にむかう道の途中には「蜀の桟道」と呼ばれる難所があった。日本ラインの浣花（華）渓はこの詩跡に見立てたものである（ただし中国の浣花渓は決して危険な断崖絶壁ではない）。

なお、【資料一四】を記載する『日本ラインの犬山』は、昭和一一年（一九三六）に改訂再版が出る（可児枡太郎『日本ラインの犬山』犬山町保勝会）。次の記述は【資料一四】に該当する部分である。

【資料一八】川下には遠く粉壁の犬山城が山裾に覗くなど誠に天下の奇勝で、これは支那に於ける蜀の桟道に能く似て居るといふので、享保の頃荻生徂来がこれを莞花渓とし、白帝城や夕暮富士と共に命名したと伝へられてゐる（一一八頁）。

白帝城の徂来命名説が他の名所にも影響し、あらたな伝説を生み出していることがわかる。

この日本ラインの浣花（華）渓は、近世には「カンカケ」と呼ばれていた。

文政五年（一八二二）尾張藩士樋口好古の『尾張徇行記』は、栗栖村の条で「村南ノ街道ニ掛橋アリ、カンカケ橋と云、長七間巾九尺二寸アリ」と記し、[注23] 天保一二年（一八四一）の「栗栖村絵図」[注24]も集落の南のはずれ近くに「カンカケ橋」を描いている。

同年成稿の『尾張名所図会』後編巻六には「栗栖桟」の図があり、「栗栖山」の項に「字カンカケなどといへるあたり」は山深く猿が多いと記す。さらに付近の「木曽川」の木々や奇石怪岩について「風景他に異なり。実に蜀江の碧水もかくやあらんとおしはからる」と記す点には、中国の名所への指向もうかがえる。[注25]

カンカケやこれに類した地名は日本全国に見られ、岩場や崖になった所が多く、鍵掛・鐘掛・鉤掛・神懸などの字があてられている。柳田国男によると、これらは鉤になった枝を投げあげて占いをした場所だという。[注26]

有名な小豆島の寒霞渓も、もとは鍵掛山・神懸山と呼ばれ、応神天皇の伝説があったが、天保二年（一八三一）、京都から土地の文

人医家のもとに来遊した著名な書家文人画家が「浣花渓」の号をつけた。以後文人墨客の訪れる名所となり、明治一一年（一八七八）に「寒霞渓」と改められたのである。(注27)

日本ラインの「浣花渓」も、民俗的な背景をもつ地名に、中国文化に憧れる文人たちが雅号をつけもてはやしたものと考えられる。

栗栖対岸の「赤壁」についても、彼らが『三国志』(注28)の古戦場や蘇東坡の「赤壁の賦」を偲んで名づけたものだろう。

二　新名所成立の背景

(1)日本ラインの観光開発

①名鉄の観光開発

日本ラインは、大正二年（一九一三）に志賀重昂が命名、名鉄が観光地として開発し、昭和二年（一八二七）、毎日新聞の日本新八景当選で全国に知られるようになった。前章で紹介した名所、特にドイツ・ライン川への見立てによる名所の成立はこの観光地化を背景としている。以下、その経緯を概観しよう。

明治末期、名古屋電鉄（現・名鉄）は米国の郊外鉄道にならって名古屋郊外に延びる郡部線を計画し、大正元年（一九一二）八月に犬山への路線が開通する。それまで特別に舟を雇うか荷物舟に便乗していた木曽川で舟遊びが行われるのは、犬山線開通後、名鉄がさかんに宣伝し、施設が整ってからである。しかし、ライン下りのためには一旦上流の土田（可児市）まで舟で上がらなければならず、舟客はあまり多くなかった。

大正一四年四月、名鉄今渡線が開通。犬山から今渡（可児市）まで路線が延び、手軽に上流に行けるようになり行楽客が増加する。当時は土田がライン下りの起点で、ここにライン遊園地があった。同年春、名鉄は犬山遊園地を開園、翌年には料理旅館を増設しこれを「彩雲閣」と名づける。(注29)かの李白の詩に因んだ名前である。

②日本新八景当選

一方、昭和二年（一九二七）四月から七月、大阪毎日新聞・東京日日新聞（現・毎日新聞）が新しい景勝地を国民投票で選ぶという触れ込みで日本新八景の選定事業を行なった。これは人々の観光開発への期待と郷土愛を刺激し全国を熱狂させる。(注30)候補地だった犬山の様子は次の記事のとおりである。

（前略）さらにまた、愛知県犬山町付近の木曽川の日本ラインを入選させるため同地では投票に全力をつくす一方同地出身の白川大阪市会議長等発起で犬山美人廿名を大阪につれ来り五月一日から三日間高島屋で犬山踊りを演じさせたり二日には犬山民謡のラヂオ放送をさせたりして同地に対する大衆の理解と応援を求めること、となった。（「選ばるゝ名勝絶景は？　日を追うて白熱化する　本社日本新八景投票戦　規定違反のハガキは無効」『大阪毎日新聞』一九二七年四月二九日朝刊）

この新八景の河川の部に、日本ラインを含む木曽川が当選する。

（前略）木曽川が日本八景に選ばれたとの報をもたらし犬山町を訪れるとまづ目につくのは『諸君の郷土愛はつひに木曽川を河川の第一位に当選せしめたり』『木曽川は日本八景に入選せり』などの貼札が辻々にはられてゐることである、（中略）更に投票運動に全力をあげて応援してゐた名古屋鉄道会社では跡田常務、飯島運輸課長をはじめ各首脳部が集まって／万歳々々いろ〳〵どうも有難う日本一の大新聞によって木曽川が真に日本一の風景であるといふことを証明されたわけです、これから会社でも犬山線に力をそゝぎ、この風景を観光する内外の旅客にいさゝかの不愉快、不便をも与へぬやう種々計画をもってゐます、（後略）（「空も地も、水も陸も　栄光に輝く歓喜　日本八景、廿五勝、百景入選で　喜び狂ふ人々　全町を挙げて　一大提灯行列を　すでに祝辞がどん〳〵来る　木曽川沿岸の犬山町」『大阪毎日新聞』一九二七年七月七日夕刊　※七月六日発行）

こうして日本ラインは全国にその名を知られ、地元もそれをもって任じるようになったのである。

(2)木曽川のライン化

①志賀重昂の命名

日本ラインの名称は、有名な『日本風景論』（一八九五）の著者志賀重昂の命名である。志賀は、日本が欧米列強と肩を並べた日露戦争後の明治四三年（一九一〇）、海軍の軍艦でドイツを含む世界一周を経験する。帰国後、大正二年（一九一三）五月、当時の愛知県知事松井茂に次のような手紙を出す。

書き置き

話半分景色三分の一と申し候　実に白帝城は話三分の一有之候
　然しライン河は御承知之通り1／3どころか1／1に有之候
日本国中にラインの如き岩高く水碧に　而も古城残礎のある処なきは遺憾に存候　此遺憾を慰めんと今日犬山城趾に登り　此処にラインの一部分を発見せしは近頃の開心に存候
　白帝城に優りラインの一部分（全部よりは劣れり　是は御承知の通り也）に劣らざる景色は犬山城趾と存候に付　今秋山痩せて葉愈ゝ黄く流涸れて水益ゝ白きの時　夕陽会なるものを犬山三層城楼上に開き度其節は小生も再び参るべく候に　明府にも御観光に願い度し
　大正二年　五月十日午後／白帝城に遊びラインを下りたる旅行者（後略）[注31]

また、同年七月一九日『中央新聞』朝刊の「名士と避暑」（八）に、次のような文章を寄せる。

（前略）木曽川岸犬山は全くライン（莱因河）の風景其儘なりと一游三嘆描く能はず　七月九日再び探討致　岸上なる不老滝の主人記念をと申し候に付　茶盆に左の悪詩を書き綴り申し候
　千里江陵一日還　来因夕照絶人間　東人漫誦西人句　咫尺無侘説犬山

起唐句　承"No Where Sunset in the World, but on the Rhine"
是は漢学者と申す日本出来て以来のハイカラなる一団有之
支那と申せば何でもエラク又有難しと思ひ李白の句を取り犬山
を白帝城と命じ　白帝城が三峡の険の起る所にして犬山が木曽
川の平流となる点と正反対なるを知らず　又白帝城が唐の頃に
てすら存在の疑はしきものなるを知らず　又「江陵」地名にし
て揚子江流にあらざることすら知らず　李白の句を誤読して犬
山を白帝城と呼做さしめ　犬山に到れば白帝館あり白帝園あり
白帝台あり　小生は此誤を正さん為　右の悪詩を賦し申し候
日本にてハイカラの骨頂と申せば漢学者漢文人に有之　夫れに
て洋学生を目してハイカラなど呼ぶは臍が茶を湧かす次第に御
座候

同年八月、雑誌『学生』に連載中の「世界の奇観」第一七回「日本のラインと日本の瑞西」によると、世界一周中に訪れたラインの風景に感動した志賀が「其匹儔を我が国土の内に需んとし、探ること二年余、茲に髣髴として之を得」たのが犬山城下の木曽川であり、山間から平野に出る大河の岸の丘に古城が聳え、それが夕日に映える点が「誠に是れ一幅ラインの縮図」だという。(注32)

②見立ての進行

志賀は従来の中国趣味を批判し、また、犬山城付近の景観を、それもひかえめに一部分をラインに見立てていたのだが、大正元年（一九一二）犬山線開通以来の観光開発の波にのり、中国趣味と新たな西洋趣味をないまぜにした称賛が普及していく。

大正一二年『天下絶勝　日本ライン名所図絵』（吉田初三郎著名古屋鉄道　名鉄資料館蔵）には、次のような記述がある。

〔日本ライン〕本邦地理学界のオーソリチー志賀矧川氏が先年これに命名し高唱宣伝せられたる結果遂に今日広く一般外人にまでも〔日本ライン〕の名を知られ年々其遊覧客が多くなって来たのである、本多林学博士は〔日本ライン〕の景は京都嵐山の景を縦横数倍に拡大したもので欧州ラインの風景に東洋山水画風の技巧を加味したものであると称えられて居る

同冊子には〈表1〉のような名所が列挙され、ジーグフリートへの言及はまだ見られないもののローレライに似たおとみ・与曽松岩が、白帝城・浣華渓・赤壁に混ざって登場している。

日本新八景選定時には、ライン川への見立てがさらに進行する。昭和二年（一九二七）七月一六日『大阪毎日新聞』朝刊の広告「日本八景　木曽川の河川美は日本ラインに尽く　天下の名川、天下の奇勝」には、次のとおり。

（前略）一体日本ラインの名称の由来をいふならば、その流域に彼フランスにおけるブドーの芳醇にも比すべき忍冬酒と、ローレライ神話にも似た伝説のあるお富与曽松の岩と、然もその上に封建時代を象徴する犬山城のあるなどが、すべてにわたって、仏のライン河に余りにもよく似ているために、志賀重昂氏がはじめて「日本ライン」と名づけたもの（後略）

また、同日の『東京日日新聞』朝刊の広告「日本八景の随一木曽

表１　吉田初三郎『天下絶勝　日本ライン名所図絵』（1923　名古屋鉄道　名鉄資料館蔵）掲載の名所および記載要旨。

天下の絶勝　日本ライン案内
【日本ライン】地理学の権威志賀重昂の命名。外人来遊。本多林学博士の礼賛。山水美。【犬山城】別名白帝城。【犬山城下乗船場】【内田の渡】【城山】奇岩。【瑞泉寺山】【中岩】大岩。【犬帰り】間道。断崖の危路。【継鹿尾の翠巒】【不老の滝】【寂光院】【継鹿尾山】【浣華渓】継鹿尾山断崖下の栗栖への道。【富士瀬】急瀬。舟夫の巧みな操船。【赤壁】大岩と中仙道の絶景。【おとみ岩・与曽松岩】ラインのローレライ神話にも似た伝説の岩。【栗栖の渡】【岩屋の観音】懸崖の岩窟。観音坂という中仙道の難所。【観音瀬】大きな瀬。【兜岩・ラクダ岩・ライオン岩・眼鏡岩・亀岩】奇岩怪石の連続。斎藤拙堂『下岐蘇川記』を紹介。【二つ岩】【遊仙岡】大正１１年１０月大木鉄道大臣が来遊命名。【乙女の滝】【土田】日本ライン遡上の終点。これより上は遡行至難。【蘇川の大観】大濤館付近の大観。【はね橋】可児川の奇橋。付近の大洞可児合は舟行の難所。土田より引き返す舟の速さ（往路３時間。復路１時間ばかり）。巌谷小波の礼賛の紹介。

附　犬山の名勝
【犬山城】一名白帝城。天守閣が木曽川に聳える絶景。夕方閣上からの眺望。【犬山公園】四季の行楽地。県社針綱神社・三光稲荷神社。西谷港の通舟会社。【瑞泉寺】応永２２年日峯和尚建立。宿龍池は無因禅師が杖で突き水が出て青龍昇天。これが寺号の起源。【継鹿尾山寂光院】孝徳天皇勅願所。護国・養蚕守護・安産の菩薩。三大縁日。座禅岩の絶景。八十八箇所。山中の仙境。【不老滝】盛夏の水浴。付近の料亭不老閣・錦水楼。【犬山の鵜飼】元禄の頃城主成瀬正親候の時代より。鵜飼の様子。

※掲載写真のキャプション
○蘇川峡中の絶景遊仙岡（大木鉄道大臣の御命名）より下流を望む　○白帝城　○おとみ・与曽松岩（ローレライ岩）　○観音瀬附近の絶景　○ラクダ岩　○眼鏡岩　○二ツ岩　○土田附近　○大濤館附近より下流を望む　○不老滝

○著者　京都市外山科字みさゝき　吉田初三郎　○著作権所有者兼印刷者兼発行者　東京市京橋区木材町三－二五　大正名所図絵社代表　大瀧新之助　○印刷所　東京市京橋区木材町三－二五　大正名所図絵社　○発行所　名古屋市柳橋　名古屋鉄道株式会社　○大正十二年九月十日印刷　大正十二年九月十五日発行　（非売品）

川の印象」は、新八景審査員の一人地理学者小川琢治に答える体裁で、次のように類似点を列挙する。

○日本ラインの由来　八景審査員小川博士に答ふ　愛知県犬山町出身（大阪在住）医学博士　大野内記

日本ラインの命名者は矧川志賀重昂先生である即ち

一、木曽川はその風光が欧州ラインと殆ど一致する

二、この絶勝を内外人（殊に外人）に紹介するには独逸ラインに似たりといふが最も近みちと解し安い

命名の理由は大体右の如くで余もたびく、この直話を聞き同感の点多きため左に追加してみる

一、欧州ラインの絶景は秋の暮霞が清きラインの水に映り城の白壁に映る様を領へるのでその風光が木曽川と極めて相似たり

二、両岸に古城残塁多きこと一致す（ゴッテスベルグの城等と犬山城其他）

三、歴史的に酷似点多し（ラインにおけるナポレオンと犬山城における秀吉）

四、ライン河におけるジーグフリードの龍の話と犬山青龍山瑞泉寺の話と類似す

五、ライン河畔には犬（Hund）の字の付く地名多し偶偶犬山なるも面白し

六、ラインには有名なるローレライの岩の神話あり木曽川におけるお富与曽松の伝説と対比して情趣多し

木曽川改名『日本ライン』なら吾々も不賛成であるが、あたかも犬山城を白帝城（李白―朝辞白帝彩雲間…）というた方が有名であるごとく、世界の名川日本ライン河に似たりとて不名誉でもなく、また改名でもなく、別名である以上、欧州と支那とを問はず何等差支ないと思ふ

殊に数十年来木曽川、犬山の名で世に浮かばなんだものが日本ラインの名で外人の遊覧客も激増したやうなわけである（後略）

こうして宿竜池も、ラインのドラッヘンフェルスに見立てられることになった。一方、昭和一〇年代に荻生徂徠の白帝城命名説が他の名所に影響したように、中国の詩跡への見立ても息を保ち続けていたのである。

三　見立ての重層と桃太郎神社

(1)重層する見立て

ドイツ・スイス文学者の宮下啓三は「見立ての文化史」の副題を持つ『日本アルプス』で、近代日本にアルプスの名を持つ山々が生まれた経過をたどっている。

宮下によれば、明治末期、「アルプス」が比喩から同一化に進むのは外国の山を体験できない日本人の憧れに応じたもので、「日本のアルプス」は国内にいながらにしてヨーロッパに身を置く喜びを日本人にもたらしたという。こうした現象が生じた基盤として、宮下は日本各地の「富士」山にふれ、日本人の見立ての伝統も指摘している。(注33)

本稿は、犬山付近の木曽川に、中国やドイツに見立てた名所が成立していたことを例示した。

このドイツのライン川への見立ては、まさに宮下の指摘する近代のヨーロッパの風景への憧憬に応じたものであり、中国の詩跡への見立ても、淵源が近世にさかのぼる中国への憧憬の結果といえる。(注34)

宮下は、伝統的な見立ての例として富士山をあげるにとどめているが、こうした中国の名所への見立てを視野に入れるなら、圧倒的な中国文化の影響化にあった前近代の、豊富な見立ての伝統が指摘できるだろう。

本稿で扱った大正から昭和初期の犬山は、近世の中国への見立てと近代のヨーロッパへの見立てが重層し、いささか古びつつあった前者もまだ命脈を保ち、観光開発に呼応して名所を生んでいた。見立ての伝統が生きていた土地なのである。

(2)中国、西洋、童話の世界

このような土地に、昭和五年（一九三〇）、桃太郎神社が創建される。

すなわち、栗栖の一小祠が桃太郎を祀った社であることや、付近に桃太郎の物語に符合する地名・遺物があるということがわかり、昭和五年に小社を改称遷座して「桃太郎神社」としたのである。

こうした桃太郎伝説の発見は昭和初年のことらしく、昭和四年三月八日『報知新聞』朝刊掲載の「木曽川畔とわかった桃太郎さんの生地　お伽噺の小父さんたちが集まって花の四月にお祭りをいたします」という見出しの記事による紹介がもっともはやい。

詳細は別稿に譲るが、この桃太郎伝説は、在来の地名や遺物を周知の桃太郎昔話のストーリーに結び付けたものだ。(注35)

いいかえれば、桃太郎昔話が繰り広げる世界への見立てであり、桃太郎との関係が「わかる」「発見される」という事態は、実は見立ての成立を意味している。

これは中国・西洋に続く憧憬の地、憧れの異郷として、昭和初年に童話の世界が注目されたことを示している。

先行する大正時代、都市市民を中心に児童文化が関心を集め、大正一一年（一九二二）の雑誌『童話研究』の創刊など、創作から伝承文芸まで含んだ童話の創作・翻案・紹介・研究が盛んになった。先の記事中の「お伽噺の小父さん」も、巌谷小波など当時広く行われた童話の口演者の愛称である。(注36)桃太郎は童話の代表とみなされ、巌谷小波『桃太郎主義の教育』（大正四年）や金田芳水『桃太郎の研究』（昭和二年）など桃太郎を扱う評釈書・研究書が出される。

児童文化関係者に影響の強かった巌谷の次の記述は興味深い。

> 頃日、我が国でも、子供に関する問題が、大分注意される様になった。そして、全国の大都会には、子供の為めの遊園地の設置が、大分要求されるようになった。（中略）尤も曾て関西のある所で、動物園の一隅に、桃太郎神社を建てやうとして、其筋の許可を願出た所が、神社法に反くからと云って却下されたと云ふことを聞いた。
>
> なるほど真面目な解釈から云へば、お伽的の架空の人物を、祭神に祀りあげる事は出来まい。然し子供の遊園地に於ける、国民性の代表物としてなら、決して差し支えはあるまいぢゃないか（「桃太郎の銅像を立てよ」『桃太郎主義の教育』一九一五東亜堂書房　二六〇～六三頁）。

こうした要請に答えたものが、栗栖の桃太郎神社と桃太郎伝説地である。

昭和五年一〇月の『日本一桃太郎会規約』に記された役員を見ると、栗栖の住民以外に犬山在住者、名鉄関係者の名がある。会長は大正一二年から当地にアトリエを構えていた観光案内図の吉田初三郎。顧問に巌谷小波。また、新八景選定時にライン川との類似点を列挙していた大野内記の名も見える。

これら観光や児童文化にかかわる人物たちが時代の動向をとらえ、名所を生む技法であった見立てを駆使し、「発見」という形で伝説

を創作していたのである。

伝説の担い手は伝説地の在住者以外に広がり、それを説き聞かす相手も他地域の者に焦点があたる。次の記述は昭和五年以前と推定される冊子『日本八景　木曽川（日本ライン）　御遊覧のしをり』（名古屋鉄道株式会社　名鉄資料館蔵）[注37]に記された「童話日本一桃太郎誕生地（栗栖村）」の条の一節である。

新緑の初夏、木曽川の勝景を訪れられる都人士よ、心あらば吾が栗栖村の詩境に杖を曳き、懐しくも美しい桃太郎物語りの事蹟を巡礼せられよ、そして繁忙極りない都会生活に疲れ、や、ともすれば失はれ勝ちな詩的感興味をこれによって新しく呼び戻し、感激に豊かであった少年時代の可憐な夢のパノラマをあなたの脳裡に展開せられよ、若しそれ愛息愛嬢を伴はれた人々は新日本の使命を双肩に擔ふべき、慈愛と勇気に満ちた新時代の桃太郎を養成する意味に於て、来遊の効果は一層顕著なものがあらうと信じます。

民俗学者の高取正男は、高僧の伝説について、原始的な民間信仰に根ざした側面以外に「もっとも高遠な、かつ普遍的な信仰を自分のものにするための手段として、それぞれの我が村の中に設定されたもの」という側面を指摘した。[注38]いいかえれば、自己の領域外の望ましいものを領域内に引き入れる仕組みである。

高取の指摘は近代以前の村に即したものだが、桃太郎伝説の場合、この仕組みがより広いレベルでも適用され、都会人が来遊可能な土地に、彼らの憧れの異郷を見立て、取り込み、提供するのに利用されたといえるだろう。

桃太郎伝説の発見により、中国の「浣花渓」に見立てられた栗栖のカンカケはさらに面目を改めた。神社の案内はこれを「願掛」と表記する。桃太郎勝利の願をかけたところだそうである。

(3)由来を語る名所の終焉

最後にメディアの問題に関して。

本稿が紹介した名所は、文章でのみ伝えられていたわけではなく、舟遊びの際など船頭の口から伝えられていたはずである。

実例は乏しいのだが、昭和二年（一九二七）八月、犬山から土田へ舟で川を上った北原白秋は、船中「これがローレライで」と案内を受け苦笑している。[注39]

大正一二年（一九二三）の名所は〈表一〉とおりだが、これらは探勝の航路が犬山から一旦上って下っていた時期に成立したものだ。当時は上り三時間、下り一時間の舟旅で、記載の順にもうかがえるように名所は主に上りの途上で出会うものだった。大正一四年の今渡線開通後はライン下りに人気が集まるとはいえ〈表一〉の名所は引き継がれ、筆者が見た範囲の昭和一〇年頃の観光案内までほぼ踏襲される。少ないながらも遡行の客を目当てにしたものだったのだろう。

一方、急流下りを売り物にする現在のライン下りは由来を持つ名所にあまりふれず、案内されるのはライオン岩など見て直ぐわかる

名所がほとんどだ。

上りの客船がいつ消滅するのか手元に資料がないのだが、昭和三一年の『日本ライン　犬山城』（角川写真文庫四四　角川書店）は犬山遊園～ライン遊園（土田）間の往復航路を記載する。昭和三〇年まで、下った舟の回収は舟自身の遡行に頼っており、その間は上りの便もあっただろう。しかし、「近年になって、下流からトラックにのせて舟を運ぶことが多くなり、帆をあげて川をさかのぼる風景はあまりみられなくなって来た」（一三頁）と同書が記すように、昭和三〇年からトラックによる回収が始まる。これにともなって上りの客船も消えたのではないか。

つまり、名所を見ることはできても、その由来を語り、聞く時間がなくなったのである。

注

（1）小塩節『ライン河の文化史』一九九七　講談社学術文庫　一四～二〇頁、立川希代子『ローレライは歌っているか―ハイネの『旅の絵』とバラード』一九九三　せりか書房　一〇四～六頁。

（2）大正後期から昭和前期、鉄道網発達にともなう観光ブームの中、大正名所図絵社、観光社などの製作工房を構え、多くの鳥瞰図形式の観光案内図を作成した画家。大正一二年（一九二三）からは名鉄の援助で日本ラインに居を移し、アトリエ蘇江画室を拠点とした（参考　図録『パノラマ地図を旅する―「大正の広重」吉田初三郎の世界―』一九九九　堺市博物館）。

（3）加治田城主佐藤紀伊守忠能は信長の中濃攻めで信長側につき、永禄八年（一五六五）近隣の堂洞城を攻める。同一〇年、忠能は信長の家臣斎藤新五郎長龍（一名利宣とも）を養子にして城を譲るが、天正一〇年（一五八二）本能寺の変で新五郎は討死。その後伯父の斎藤（肥田）玄蕃が城を預かるが、金山城（岐阜県可児郡兼山町）の森長一に攻められ玄蕃は病死。城は森氏に属した（岐阜県加茂郡役所編・発行『美濃加茂郡誌』一九二一　一〇四三～四五、一一七九～八二頁）。これらの出来事は近世の『堂洞軍記』に記される（新訂増補『史籍集覧』武家部戦記六　一九六七　臨川書店　所収）。信長の中濃攻めの戦乱は付近の歴史的大事件として記憶されたと考えられる。日本ラインの栗栖対岸山上にあった猿啄城も永禄八年に落城した。

（4）「機織り淵」『日本昔話事典』一九七七　弘文堂　七四一頁。

（5）柳田国男監修・日本放送協会編『日本伝説名彙』一九七一　日本放送出版協会　二五八頁。

（6）愛知県教育会『愛知県伝説集』一九三七　郷土研究社　一四二頁。

（7）後藤時男『わたしたちの岐阜県の伝説』一九七二　大衆書房　八八頁　筆者要約。

（8）堀田吉雄『東海の伝説』一九七三　第一法規　一五六頁　筆者要約。

（9）前掲注（1）小塩五六～七頁。

（10）犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会『犬山市史　史料

編四　近世　上』一九八七　犬山市　九三頁。

(11) 前掲注（10）九六頁。

(12) 前掲注（10）四四六、四五〇頁。

(13) また、宝暦二年（一七五二）の尾張藩の地誌『張州府志』の瑞泉寺の項に「造営開祖日峯舜和尚。（中略）扶桑禅林僧宝伝又載其伝日。師偶至鹿尾山。寓一教寺。閲大蔵数年。山下居民捨山為寺。苦無水。令弟子玄瑞迹之。甘泉湧出。仍名瑞泉」とある（これは延宝三年（一六七五）序『扶桑禅林僧宝伝』巻第十「養源舜禅師伝」の記載とほぼ同じ。『大日本仏教全書』七八　一九一七　仏書刊行会　一〇二頁）。竜の出現にふれていないが、『張州府志』は瑞泉寺十境の一つとして「宿龍池。在于方丈後。」と記しており、犬山では竜の件も語られていた可能性がある（『張州府志』一九一四　名古屋史談会　四四頁）。なお、横山住雄による『犬山視聞図会』乾巻の注（三五）によると、日峯が玄瑞に導かれて泉を発見し瑞泉寺を建立した話は、明応五年（一四九六）『正法山六祖伝』にも見られるという（林英夫編『日本名所風俗図会』六　東海の巻　一九八四　角川書店　七五二頁）。

(14) そうなると、水不足などの害が強調され、「昇天」も逃亡・退散に変化しよう。たとえば、次の愛知県八名郡大野町（現・南設楽郡鳳来町）の板敷川（宇連川）黒淵の伝説である。

黒淵は近づくとオコリを病んで死ぬという魔の淵で、その主は神龍として恐れられていた。ある凶作の時、人々は神龍の祟りと考えて鎮めようとしたが、人命まで傷つけたので、領主鈴木氏が奥山方広寺の真覚禅師に祈祷を頼んだ。禅師が河原で読経し大喝すると神龍は失せ散じ、淵は澄み、祟りは止んだ。鈴木氏は禅師に頼んで禅林寺を河原に移し、淵龍寺と改め、神龍を鎮守した（愛知県教育会『愛知県伝説集』一九三七　郷土研究社　二七四頁　筆者要約）。

あるいは犬山でも、高僧の竜退治の形になった宿龍池の異伝があり、それがドラッヘンフェルスの伝説を引き寄せたのかもしれない。しかし、「ジークフリートのドラゴン退治」に言及する【資料八】は竜退治の話ではなく、やはり無理な見立てである。

(15) 「風光如画不堪情／況是誰名白帝城／今後未知物存没／渡頭独立聴灘声。」また「此是吾州白帝城／時有或有送猿声／長江月出人呼快／舟棹金波埋処行。」

(16) 「一従躍馬倚崔嵬／千古孤城煙外開／天未浮雲空自在／中原秋色爲誰来／瞿塘返照従行慢／赤甲晴嵐落酒盃／試向最高楼上望／不堪暮雨擁荊台。」

(17) 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会編『犬山市資料』第三集　一九八七　犬山市　一七五頁。

(18) 市橋鐸『松平君山考』一九七七　名古屋市教育委員会

(19) 『尾張名所図会』編者の岡田啓は尾張藩に仕えた国学者。藩の儒学者深田正韶らと『尾張志』（弘化三年　一八四六）を編纂し、蒐書、博覧強記、記事の精確さで知られた。この『尾張志』は君山編の『張州府志』（宝歴二年　一七五二）を補訂したものでもある（林英夫編『日本名所風俗図会』六　東海の巻「解説」一九八四　角川書店、『名古屋市史人物編』第二　一九三四　名古屋市役所　一三四頁）。

(20)『幣帚集』(名古屋市鶴舞図書館蔵、蓬左文庫蔵)には目を通したが、欠本もあり、確認できていない。
(21)『張州府志』一九一四　名古屋史談会　一九頁。
(22)斎藤拙堂「下岐蘇川記」(天保八年　一八三七)も、木曽川で長江三峡下りや李白の詩を意識している。ただし、犬山城を白帝城とは呼んでいない。
　なお、村瀬太乙「白帝城」二編について。村瀬太乙(一八〇三～一八八一)は犬山藩の儒学者。弘化元年(一八四四)犬山藩に抱えられ名古屋邸に出仕。明治三年(一八七〇)犬山に転居。没後の大正二年(一九一三)に詩集『太乙堂詩抄鈔』出版。「白帝城」二編は同詩集に「托鉢僧」「犬山城」の題で収録。太乙の経歴や詩集の掲載順などから明治以降の作と推定される。(参考　吉田暁一郎『村瀬太乙の生涯』一九六四　県政新聞社、向井桑人『村瀬太乙』一九八一　愛知県郷土資料刊行会)。
(23)『名古屋叢書続編』六　一九六七　名古屋市教育委員会　二三六頁。
(24)『犬山市史　史料編　一　近世絵図集』　一九七九　犬山市教育委員会。
(25)林英夫編『日本名所風俗図会』六　東海の巻　一九八四　角川書店　四四一、四四三頁。
(26)柳田国男「こども風土記」『定本柳田国男集』二一　一九七〇　筑摩書房　一七頁)。
(27)川野正雄編『内海町史』一九七四　香川県小豆郡内海町　六二八～三〇頁。
(28)赤壁は中国湖北省嘉魚県にある三国時代の古戦場。この赤壁に因み、湖北省黄岡県の赤壁(赤磯鼻)で北宋の蘇東坡(蘇軾)が有名な「赤壁の賦」を詠む。なお、兵庫県姫路市木場の海岸にも小赤壁があり、頼山陽が名づけたという。
(29)名古屋鉄道株式会社社史編纂委員会『名古屋鉄道社史』一九六一　名古屋鉄道株式会社　五一～五四、一一〇～一一四、四七一～七五頁。『可児町史　通史編』一九八〇可児町　八九二～九三頁。
(30)詳しくは拙稿「熊野の桃太郎―見立て・まなざし・観光開発」『比較日本文化研究』四　一九九七を参照。
(31)写真「日本ラインに就ての手書」松井茂所蔵　後藤狂夫『我郷土の産める世界的先覚者　志賀重昂先生』一九三一　警眼社・松華堂　七六～八〇頁。
(32)志賀重昂「日本のラインと日本の瑞西」『学生』四―八　一九一三　五三頁。
(33)宮下啓三『日本アルプス』一九九七　みすず書房　二三四～三七頁。
(34)見立てを生んだ背景として尾張藩や犬山藩の儒学関係者の活動が考えられ、さらに瑞泉寺が京都妙心寺と関係が深いことから、さかのぼって五山の禅僧らの活動の可能性も推測される。
(35)拙稿「『桃太郎神社の誕生』にむけて」『世間話研究』四　一九九三、同「犬山市周辺のヤマノコ行事―濃尾両地域の山神信仰とその特殊化について―(上)・(下)」『法政人類学』五二・五三　一九九三、同「童話見物の誕生―桃太郎伝説の成立に見る口承

文芸の観光化について―」『旅の文化研究所研究報告』六　一九九八参照。

(36) 大正一五年（一九二六）の中田千畝『日本童話の新研究』（一九八〇復刻　村田書店）の序文に同時代の概観がある。

(37) 名古屋鉄道は昭和五年に名岐鉄道に社名変更する。

(38) 高取正男『民俗のこころ』一九七二　朝日新聞社　二五二頁。

(39) 北原白秋「木曽川」大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編『日本八景　十六大家執筆』一九二八　大阪毎日新聞社　一八六頁。

(40) 名古屋鉄道株式会社社史編纂委員会『名古屋鉄道社史』一九六一　名古屋鉄道株式会社　四七九頁。

（さいとう・じゅん／天理大学文学部歴史文化学科）